（別紙様式４―Ｂ）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

山梨県立大学
福田　和

留学で学んだこと

（１）DMACC での生活

英語のブラッシュアップ

アイオワ州に渡航してすぐ、交換留学先の DMACC にて英語（となぜか数学）のテストを受けた。私はそのテスト結果をもとに、まずは ELL（English Language Learners）クラスを受講することにした。クラスは、Reading&Communication、Writing&Grammar など、英語の技能を総合的に学べるよう設計された内容だったのだが、留学当初は慣れない英語での授業に戸惑う毎日だった。英単語一つにもたくさんの意味や使い方があり、必ずしも辞書が通用するわけではないということを、思い知ったからだ。中でも苦労したのが、Discussion だ。中国、エジプト、ミャンマー、ベトナム、ウクライナなど世界各国から集まったクラスメイトたちは、とにかく話す。自分の意見を必死で伝えようとする姿に、私は圧倒された。先生やクラスメイトからの質問は理解できるのに、自分の意見をうまく言葉にできない、、、。言いたいのに、言えない、、、。とてももどかしく、悔しい気持ちだった。それでも、言いたかったのに言えなかったこと、授業内でわからなかったことなどを帰ってから整理したり、クラスメイトと一緒に課題に取り組んだりしていくうちに英語にだんだん慣れてきて、いつの間にかコミュニケーションを楽しめるようになっていた。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で留学を中止し帰国した後も、幸いオンラインで授業を受けさせていただいた。アイオワの朝と山梨の深夜。13 時間の時差と闘いながら受けた Reading の授業は忘れられない。オンライン上で出される大量の課題。わからない時にはクラスメイトと意見交換を繰り返した。なんとか最後まで授業を受けることができたのは、クラスメイトや先生と連絡を取り合い、互いに支え合えたからだと思う。当たり前かもしれないが、自分一人ではできないこと、わからないことがある時、また苦しい時、支え合える存在がいるとこんなにもモチベーションが変わるのだなと私は留学を通して身をもって体感した。

インターナショナルクラブでの国際交流活動

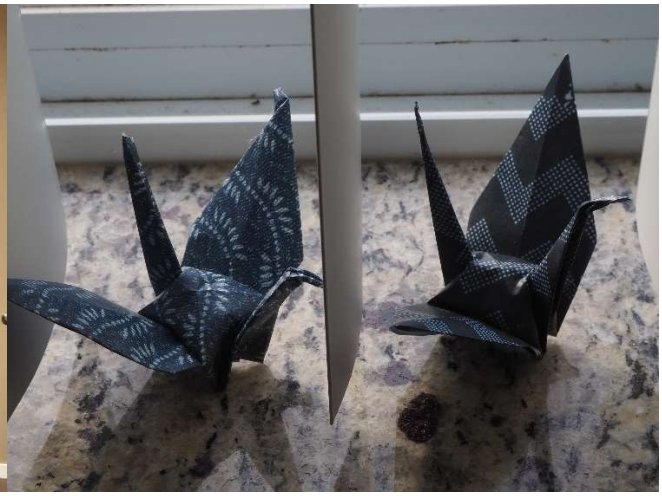
慣れない環境の中で、人と交流したりコミュニケーションをとったりするのが楽しい！と感じられるようになったのには、きっかけがあったように思う。その一つが、インターナショナルクラブだ。名前の通り、様々なバックグラウンドを持つ学生が参加しており、英語だけでなく常に多言語が飛び交っていた。毎週行われるクラブ活動では、アイオワ州会議事堂や、デモインの美術館、博物館の見学、ゲーム、スポーツ、食事など様々な体験をした。活動の中で最も印象的だったのは、Multi-Cultural Festival の開催だ。クラブのメンバーが各自出身国の食べ物を作って持

ち寄り、販売。その収入を活動資金にした。私はスタッフだったため、初めて見る世界各国の美味しそうな料理をあ～食べたい！！と思いながらも我慢して、ソース焼きそばと塩焼きそばを販売していた。茶色い見た目にナニコレ？という顔で尋ねてくる学生も、日本の料理だと紹介すると購入し、美味しいと言って食べてくれた。最後にはなんとか完売。（よかった、、、。）「食」の他にも、伝統衣装のファッションショー、歌やダンスのステージなどで盛り上がった。浴衣に興味を持ってくれる方が多く、沢山写真を撮っていただいた。この時感じたのは、自分の言動が日本のイメージをつくってしまうことのプレッシャーだった。焼きそばにしても、浴衣にしても、それがどういうものなのか、私はきちんと理解しているのかな？と考えさせられた。留学中、周囲の方から日本や山梨について質問されるたび、自分が何も知らないことを痛感。国際交流を通じて、これまでよりも母国や生まれ育った山梨のことを考えるようになった。

（２）驚きの連続だったルームシェア

アイオワ州に到着して２日目。人生初のルームシェア生活が始まった。渡航前はどんな人と住むのか不安でたまらなかったのだが、幸いなことに、私はアイオワ出身でDMACC学生の２人のルームメイトに恵まれた。彼女たちの話す内容を理解できず「何て言った？」と何度も聞き返し、つたない言葉を話す私に懲りず、温かく接してくれた。それでも、文化の違いを感じる場面が沢山あった。例えば、食事。ルームメイトが作ってくれたパスタを食べていた時のこと。私はお腹が空いていて、日本で麺を食べ

る時のようにパスタをすすってしまったのだ。するとルームメイトの表情が強ばった。“messy!”と言われ、これがマナー違反だと知った。他にも、食事をするテーブルに靴を履いたまま足をのせたり、腐ったミルクが入ったままの容器をゴミ箱に捨てたりと、彼女たちにとっての「当たり前」に、最初から最後まで驚きが尽きなかった。育った環境も宗教も、考え方も異なる私たちが、一緒に料理をしたり、折り紙で鶴をつくったり、映画を観たり、恋愛の話で盛り上がったり、ドッキリをしかけ合ったりして感じたことがある。それは、私たちはまったく違うようで、実はあまり変わらないということだ。異なる文化を持つ私たちだが、コミュニケーションを通じて喜怒哀楽を共有できる。相手を理解したい、相手のために何とかしたい、そんな気持ちがあれば、国際交流は誰にでもできるのかもしれない。



（３）学外活動

<u>まちの中で見聞きしたユニバーサルデザイン</u>

私は、ユニバーサルデザイン（UD）発祥の地であり多民族共生国家であるアメリカでアイオワ州を拠点とし、UD がどのように観光まちづくりに取り入れられているのかを調査していた。様々な施設やまちの中で私が驚いたのは、段差の少なさだ。スロープが配備されており、車いすやベビーカー利用者にはもちろん、子どもやお年寄り、妊婦など多くの人にとって利用しやすいつくりになっていた。その一例として、米国最大級の動物園 Omaha's Henry Doorly Zoo and Aquarium がある。私が確認できた限りでは園内に段差を通らなければならない箇所はなく、また通路は、車いす利用者やベビーカーがすれ違え、一回転できるほどの幅が十分に確保されていた。日本では、現在高齢化が進んでおり、今後車いすを利用する観光客の数はさらに増加することが予想される。したがって、山梨県内の観光施設においても、スロープの整備や、十分な幅が確保された通路の整備の需要が高まっていくと考えられる。これに加えて、こうした環境整備は、観光客のみならず地域住民が安心して暮らせるまちづくりを実現

するための一助となるのではないだろうか。

次に驚いたのは、デモイン市内を循環する全てのバスが、UD に対応していたことである。バスの前方に車いす利用者のためのスペースや優先席があり、車いす利用者が乗車する際は運転手が手際良く座席の調節をして準備を整え、車体からスロープを出し乗客を迎えるというのをごく自然に行っていた。また、すべての乗客が乗車する際に車体を下げてくれたことも印象的だった。歩幅の小さな子ども、足に負荷のかかりやすい高齢者、動きが制限される妊婦など様々な人にとって嬉しい心遣いであると感じた。さらに、バスのフロント部分には、自転車を積むことができるラックがあり、乗客が無料で利用していた。観光地において自転車ツーリズムなどを推進する場合には、観光客がどのように移動するかという点まで想像し、自転車での移動と公共交通機関の利用をセットで考える必要があると考える。輪行可能なバスの整備を進めることは、アクセシビリティを高め、最終的には観光客や地域住民により快適に過ごしていただくことにつながるのではないだろうか。

次に、ウェブサイトで提供する情報についてだ。2019 年 11 月 12 日に Drake University にて UD に関する研究を行っている Molly Wuebker 先生にお時間をいただき、UD を観光に導入する際、重要となる点についてご意見を伺った。Molly 先生は、ウェブサイトも観光地へのアクセシビリティの重要な指標だと仰っていた。具体的には、観光客に目的地として選んでいただくためには、施設の構内図や館内案内動画などを公開することが重要だというご意見をいただいた。例えば、①駐車場から施設までどのように移動するのか、②車いすやオストメイト対応のトイレがどこにあるのか、などといった情報は、観光客が旅行の計画を立てる際に役立つ。また、発達障害を抱える子どもは初めて訪れる場所に大きな不安を感じることが多いことから、安心して旅の準備をしてただけるよう、施設の景観や雰囲気を確認できるコンテンツを公開することが理想とだという。以上より、山梨県が発表している「公共建築のユニバーサルデザインに関する指針」のチェックリスト、「情報」の項目に、ウェブサイトにおける施設案内動画の公開などといったチェックポイントを追加することの必要性を強く感じた。

留学生活を通して、はじめて外国人として一定の地域に滞在した私は、ピクトグラムなど案内表記の重要さも再認識させられた。異文化の中で過ごす外国人にとって、一目でわかる案内表記は行動の助けになる。また、場所によって表記がバラバラな状態ではなく統一されていると、より理解しやすい。それは、観光客などが安心して、落ち着いて行動することにもつながるのではないかと感じた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

<u>学び舎アイオワでのボランティア</u>

子どもたちが日本語や日本文化を学ぶための教室「学び舎アイオワ」で、毎週土曜日に、先生のアシスタントをさせていただいていた。子どもたちが、それぞれのペースで確実に学んでいく姿に、とっても勇気づけられた。通い始めた頃は、子どもたちとどのように接したらよいかわからず、とにかく苦戦。しかし徐々に対話ができるようになり、学び舎での活動は私の週末の楽しみになっていた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

今後どのように活かすか

（１）異文化交流

アイオワ州シンプソン大学とのオンライン交流事業

帰国後、私はご縁があり、アイオワ州のシンプソン大学と山梨県立大学の有志学生と共に、毎週１回オンラインでの交流活動を行う機会をいただいた。私たち学生が主体となり、食・地理・歴史などをテーマに、日米の文化について体験談を交えて紹介し合い、意見交換をしている。うまく英語が聞き取れなければ聞き返し、画像やショートムービーなども使った。この活動を通じて、私たちは英語を学ぶ喜びと、異文化交流の意義を再認識してきた。今後は、オンラインを活用した異文化交流がさらに開かれたものとなるように、私にもできることがないか引き続き探っていきたい。

（２）コミュニティデザインを身近なところで

アイオワ州では、様々なコミュニティ（デザイン）を目にした。具体的には、日米協会やミャンマーのコミュニティといった国ベースのもの、アジア出身の移民を対象としたイベント（毎年行われコミュニティが形成されている。）、住民と警察官が地域の安全強化や双方の信頼関係の構築を目指し形成しているものなどがあった。今後日本では人口減少が進み、それと同時に外国人材受け入れ拡大により、海外からの移住者が増加すると考えられる。つまり、過疎化が進み人口が減る中、異なる文化を持つ人々と共に暮らしていくことが予想される。したがってアイオワ州で見聞きしたコミュニティ（デザイン）について考えることは、日本や山梨の将来を考える上で今後さらに重要となっていくのではないだろうか。まずは、自分の身近なところから、地域の中で人と人とがつながり、支え合うための方法を、私なりに模索していきたい。

（３）ユニバーサルデザイン

現在、私の所属する山梨県立大学の吉田均研究室では、甲府市内施設のUD化の一環として、甲府市生涯学習室歴史文化財課と協働で「甲府市信玄ミュージアムと堀田古城園のUD化事業」に取り組んでいる。国土交通省によって定められた案内用図絵記号（JIS Z8210）や、国際規格ISO7001等を用いることで、より多くの人々にわかりやすい案内表記を設置することを目指している。どんなピクトグラムを、どの大きさで、どの高さに設置したらよいか、試行錯誤しながら最適な位置を見つけ出すのはたいへん難しい。しかし、こうした取組みが大学生をはじめ、地域住民も参加可能なUD化活動の一例となり、微力ではあるが観光客が快適に過ごせる施設を実現することの一助となることを願っている。

最後に

最後に、大村智人材育成基金事業のご支援により、このような貴重な留学の機会をいただけたこと、そして本留学にあたりこんな私に力を貸し温かく支えてくださったすべての方々に心からの感謝を申し上げ、留学の報告としたい。